

# 形容詞と動作主名詞との結合についての一考察

月 足 亜由美

## An Analysis of the Connections Between Adjectives and Agentive Nominals

TSUKIASHI Ayumi

**Abstract** : This paper discusses the combination of a wide range of adjectives and agentive nominals, mainly focusing on what parts of domains of the modified agentive nominals are activated and referred to by the modifying adjectives. One of the basic questions is why and how *young* in *young learners* refers to the age of the people referred to, whereas *fast* in *fast learners* refers to the way or speed of their learning. I have made a classification of adjectives ; stative, dynamic, and determining adjectives, and attempted to clarify the relations of these adjectives and agentive nominals. Certain kinds of adjectives, ones which express stable and enduring attributes of a person, almost persistently modify the “person” domains of the agentive nominals. In understanding the combinations of adjectives and agentive nominals, a number of factors, e.g. whether the adjectives and the agentive nominals are individual-level or stage-level, and which part of the domains of the agentive nominals is activated by the adjectives, should be taken into consideration.

**Keywords** : agentive nominals, reference modification, referent modification, individual-level nominals / predicates, stage-level nominals / predicates, domains

### 1. 序

形容詞が名詞あるいは動作主名詞 (agentive nominals) を修飾する方法において, Bolinger (1967) の reference modification (指示修飾) と referent modification (指示物修飾) という区別が存在する。例えば, 指示修飾の (1 a) は “She dances slowly.” に近い意味を持ち, dancer という名詞の概念, さらには動作主名詞の基盤となる行為について言及しているのに対し, 指示物修飾の (1 b) においては指示される人物の, 人としての属性を表している。

- (1) a. She is a slow dancer.  
b. She is a blond dancer. (安井ほか 1976 : 191)

このように dancer については指示修飾と指示物修飾の両方が可能であるのに対し, 例えば eater については (2 b) にみられるように, 指示物修飾が難しい。

- (2) a. He is an enormous eater.  
b.\* He is an American eater. (安井ほか 1976 : 192)

安井ほか (1976) は eater のような動作主名詞は名詞らしさの度合いが低く動詞的性質をかなり強く残しており,

副詞（この場合は *enormously*）に対応する形容詞による修飾だけが許されるとしている。しかし、*eater* のほかの例をみると、以下のように、必ずしも対応する副詞を持つ形容詞だとは言えず、動詞＋副詞で言い換えることが難しい場合もある。

- (3) a. He is a good eater.  
 b. He is a picky eater.  
 c. He is an emotional eater.

(3 a) は食べることを始めて間もない子どもについて何でも良く食べるという状況を表すことが多いが、*good* に対応する副詞を使った文 *He eats well.* は少し意味が異なり、むしろ *He is a healthy eater.* に近い。(3 b) は食べることに對して *picky* である人、(3 c) は何らかの感情が高まったときに食べてしまう人という意味で、いずれの場合も動詞＋副詞によるパラフレーズが可能な意味を超えた、複雑な状況を表現している。

さらに、*learner* と形容詞との結合について考えると、*fast/slow learner* では指示修飾、*young learner* では指示物修飾が成立している。(1) の職業名を示す *dancer* に比べると、*learner* は職業ではないという点で名詞らしさの度合いが低いといえる。それに関わらず *dancer* と *learner* は、指示修飾と指示物修飾の両方が可能であるという点では共通している。「名詞らしさの度合い」という概念についても、どのように判断できるのか、基準が不明なままである。*fast/slow* は動作主名詞の基盤事象に、*young* は人としての側面にそれぞれ焦点を当てているが、形容詞によるこの違いはどの程度安定的にみられる現象なのだろうか。

本稿では、形容詞と動作主名詞の結合において、双方のどの側面がどう結びついて言語化されるのかという問題を考える。まず次節で動作主名詞の意味と特徴を確認し、形容詞と結合したときの問題点を整理する。3 節では形容詞を分類してどのような場合に指示修飾あるいは指示物修飾になるのかといった問題を検討する。

動作主名詞の問題を考える際に関わってくる重要な要素として、その動作主名詞が *individual-level nominal* か *stage-level nominal* (Pustejovsky 1995) かということがある。形容詞においても *individual-level predicate*, *stage-level predicate* という区別があり、形容詞と動作主名詞の各結合においてどの組み合わせになっているかという点も以下で考えることにする。

## 2. 形容詞＋動作主名詞の問題点

まず、動作主名詞が表す意味について確認しておきたい。意味上の基本的な区別として、動作主名詞には「役割、職業など恒常的な性質」を表すものと「その場でしか成り立たない一時的な性質」(影山 2002 : 46) を表すものがあり、それぞれ上述の通り、*individual-level nominals* (個体解釈名詞) と *stage-level nominals* (事態解釈名詞) と呼ばれる。

- (4) a. The violinist is eating lunch at the cafeteria.  
 b. The passengers are eating lunch on the plane. (Pustejovsky 1995 : 229)

個体解釈名詞である (4 a) の *violinist* はこの文の発話時、つまり昼食を食べている間も *violinist* であるのに対し、(4 b) の事態解釈名詞の *passengers* は発話時、さらに飛行機に乗っている間は *passengers* であるが、飛行機を降りればその性質はなくなる。事態解釈名詞の例として、Pustejovsky (1995) は *pedestrian*, *student*, *passenger*, *customer* を挙げているが、これらすべてが常に事態解釈といえるかは疑問である。*pedestrian*, *passenger* はほぼ常に事態解釈であるが、*customer* は例えば *He is a very important customer of mine.* という例ではその人のある程度長期にわたる役割を表しており、個々の語において差異がみられる。例えば *liar* も、その場でそのとき嘘をついた（と聞き手が思った）人に対し *You're a liar!* と発言する場合は事態解釈名詞だが、いつも嘘をつく人に対して言及する場合は個体解釈名詞といえる。主として事態解釈名詞として捉えられることが多いものはほかに *caller*, *visitor*, *client*, *participant*, *questioner*, *panelist*, *presenter*, *speaker*, *winner*, *loser*, *candidate*, *voter*, *respondent*, *informant*,

applicant などがあり、典型的にその場の役割を表すものは (5 a) のように時間的に限定されていることを示す修飾語句と共起可能である。

- (5) a. John is today's presenter/winner.  
b.\* John is today's economist.

(5 b) が示すように economist は基本的には個体解釈名詞であり、ほとんどの場合その人の職業を表し、その場で経済について論じている人がいてその人を economist と呼ぶことがあっても、皮肉のような特殊な意味においてである (Jackendoff 2010 : 431)。同様に, violinist も (6) のように事態解釈が可能であるが、例えばオーケストラのメンバーが余興などで楽器をお互いに取り換えて、本来は violinist ではない人たちがヴァイオリンを弾いた場合のような、特殊な状況において発話された文として挙げられている。

- (6) None of the violinists can play the violin! (Jackendoff 2010 : 431)

よって、動作主名詞の基盤となる行為を「恒常的・潜在的に行う人」か「その場限り一時的に行っている人」か、という action modality (Jackendoff 2010) の側面は語彙の意味の主要な一部であるが、ある語が常にどちらかの解釈になるというわけではなく、語用論的な要素が大きく関わっているといえる。

Jackendoff (2010) は、例えば violinist は職業 (occupation) (=7 a)、習慣的な行動 (habitual activity) (=7 b)、能力 (ability) (=7 c) を示すことができ、あいまいであるとしている。

- (7) a. She's a violinist in the Pittsburgh Symphony but hasn't played since they went on strike.  
b. She's an occasional violinist.  
c. She's a good violinist, but hasn't played since she sold her violin ten years ago. (Jackendoff 2010 : 431)

いずれの場合も発話時にヴァイオリンを弾いている必要はなく、継続的で潜在的な性質を表していることから個体解釈と考えると問題ない。(7 b) と (7 c) で violinist を修飾している形容詞は、どれくらいの頻度でそれを行う人か、また、どの程度の能力を持つのかを特定する働きを持っている。このような形容詞と動作主名詞の結合関係を考えるとき、各語のドメイン (domain) の存在が重要なものとして現れる。

私たちが語の意味を理解する際、理解の基盤となるドメインが活性化されるが、ほとんどの語や形態素の理解において、いわゆるマトリクス (matrix : Langacker 2008) と呼ばれる、複数のドメインが関わっている。よって上のような語と語の結合を考える際、李ほか (2013 : 99) が述べるように、「複数のドメインと複数のドメインの結合」として捉える必要がある。李ほか (2013) では、「白い家」という句において、「家」を構成する以下の複数のドメインのうち、色ドメインが活性化されることを論じている。

- (8) 白い家  
a. 家の中心ドメイン：素材ドメイン、形態ドメイン、機能ドメイン、色ドメイン、など  
b. 「白い」との結合時の「家」の中心ドメイン：色ドメイン (李ほか 2013 : 102)

同様に (7 b) の occasional violinist, (7 c) の good violinist の結合において, violinist の以下のようなドメインが関わり、活性化されると考えられる。

- (9) a. violinist の中心ドメイン：基本ドメイン・形態ドメイン (人であること)、機能ドメイン、能力ドメイン、社会的ドメイン (いつどこで、どのような活動や練習をしているか、など)  
c. occasional との結合時の violinist の中心ドメイン：社会的ドメイン  
d. good との結合時の violinist の中心ドメイン：能力ドメイン

典型的には事態解釈名詞である *visitor*, *customer* が形容詞と共に起る場合をみてみよう。

- (10) a. Rina is a frequent visitor to the city.  
 b. Good products attract good customers. (LDOCE)

(10 a) の *visitor* は頻度を表す形容詞を伴い、この場合は習慣的な行動を表す個体解釈名詞である。また、(10 b) は (7 c) と同じ形容詞 *good* が使われているが、*customer* の能力を表しているわけではなく、「たくさん買い物をしてくれる良い客」という意味である。*good* が *violinist*, *customer* それぞれと結合する場合に生じる意味の違いは、どのようにして生じるのだろうか。*good chair* と *good table* が何をするのに *good* かという点で異なるのは、名詞が何をするために存在するものかという点に起因しているが、それと同様、*violinist* と *customer*, つまり修飾される名詞の性質によるものだという見通しがつく。*good* と結びつくドメインがそれぞれに異なっており、(7 c) は能力ドメイン、(10 b) は機能ドメインであると考えられる。

次の3節では形容詞と動作主名詞の関係をできるだけ包括的に捉えることを目的とし、形容詞を分類して、どのような動作主名詞と結合するか、どのような結合関係で指示修飾あるいは指示物修飾になるか、各語のドメインがどう関係してそうなるのかといった問題を考える。

### 3. 形容詞の分類と動作主名詞との結合

形容詞は基本的に状態を表すが、その時間的安定性の点において個々の語が連続性をなすことは古くから指摘されている (Givón 1979)。Quirk et al. (1985: 434-435) でも *stative* (状態的), *dynamic* (動態的<sup>1)</sup>) という区別が挙げられており、動態的形容詞においては、その属性の所有者によるコントロールができ、よって時間的に制限することが可能であるとされている。これらの特性により、状態的形容詞の *tall* は進行形の文や命令文で生じ不可能だが、動態的形容詞の *careful* は可能であるという違いが生じる。

- (11) a. \*He's being tall.            \*Be tall.  
 b. He's being careful.            Be careful.

形容詞と動作主名詞の結びつきを考えるにあたり、この状態的・動態的という区別を出発点とする。以下の3.1で状態的な形容詞との結合について、3.2では動態的な形容詞との結合を考える。「状態的」「動態的」には、それぞれ「恒常的、潜在的」「一時的、その場限り」という性質が結びつき、*individual-level predicates*, *stage-level predicates* に相当すると考えられる。

限定用法の形容詞の分類において、状態的、動態的のほかに少なくともあと2つの種類の形容詞がある。Radden & Dirven (2007) では *denominal adjectives*, *determining adjectives* と呼ばれるもので、このうち後者については3.3で扱う。前者は名詞から派生した形容詞で、例えば *Martian invaders* (Radden & Dirven 2007: 150), *classical writer* のようなものがあるが、この種の形容詞は動作主名詞がどのサブカテゴリーに属するかを示す場合が多く、動作主名詞との修飾関係が単一的であると考えられるので、本稿では論じない。

#### 3.1 状態的な形容詞と動作主名詞の結合

状態的な形容詞はヒトとしての静的、恒常的な属性を示すので、動作主名詞を修飾する場合、指示物修飾である確率が高いと予想されるが、指示修飾の場合も存在する。それはどういった場合で、なぜ指示修飾になるのだろうか。(12)は状態的形容詞を意味的に分類してみたものである。動作主名詞は常にヒトを指示するので、例えば味を表す *delicious* などとは基本的に共起しないが、分類上は含めておく。また、個々の語が表す時間的安定性においては幅があり、動態的に近く、例えば (12 i) の中の *funny* のように進行形の文で使用できるもの (e.g.

1) 「状態的」「動態的」という用語は、池上ほか (1995) による。

He's being funny.) もある。

(12) 状態的な形容詞 (stative adjectives)

- a. 性別 : male, female
- b. 国籍, 出自 : Japanese, American, foreign, etc.
- c. 新しさ, 古さ, 年齢 : old, new, young
- d. 長さ, 身長 : tall, long, short
- e. 味, 臭い : delicious, bitter, sweet, sour, stinky, smelly
- f. 大きさ, サイズ, 重さ : big, large, huge, enormous, tremendous, small, tiny, fat, slim, skinny, thin, deep, shallow, light, heavy
- g. モノの状態<sup>2)</sup> : tidy, dirty, messy, firm, soft, warm, cool, cold, hot, easy, difficult, tough, rural, local, urban, natural, important, famous, well-known, safe, dangerous
- h. ヒトの外面的特徴 (容姿・外見など) : beautiful, neat, attractive, elegant, strange, pretty, cute, handsome, ugly, plain
- i. ヒトの内面的特徴 (身体的状態・人柄・技能など) : healthy, sound, strong, kind, gentle, shy, silent, quiet, noisy, mean, picky, choosy, fussy, generous, funny, cheerful, interesting, strange, confident, proud, active, passive, intelligent, smart, stupid, crazy, poor, rich, noisy, talkative, polite, rude, friendly, influential, powerful, passionate, serious, brave, native, lively, aggressive, violent
- j. 評価, 質, 価格 : good, great, wonderful, excellent, outstanding, nice, successful, skillful, amazing, fine, bad, terrible, horrible, lousy, awful, expensive, cheap

状態的な形容詞が表す中でも最も安定的な属性である, (12 a-d) の例をまずみてみよう。下の (13) の例は, 動作主名詞が職業名を示すもの (13 a) と, その場限りの役割を示す, いわゆる事態解釈名詞のもの (13 b) であるが, いずれも形容詞はその人としての属性を表すと理解される, 指示物修飾である。性別, 国籍, 出自といった特に安定性・継続性が高い属性を示す形容詞は, 動作主名詞を修飾してもその人の人としての側面, つまり形態ドメインに焦点を当てるといえる。

(13) a. male/young/tall dancer

- b. 'The problem with the English,' complained one American visitor, 'is that you never know when they are joking . . .'

(*Watching the English*, p.65 ; 下線は筆者)

(14) a. He is my old customer/client.

- b. He is the new owner of this house.

- c. Misha Sagiryan, the young owner of two fitness clubs in Moscow, says he used his partner's connections to . . .

(COCA ; 下線は筆者)

(14) は (12 c) で挙げた形容詞の例である。Taylor (1992) が論じたように, an old friend は「高齢の」という指示物修飾と「長年にわたる」という指示修飾の両方の解釈が可能であるが, (14 a) は my という所有格が付いていることにより指示修飾の解釈が確定する。(14 b) の new も owner のステイタスについて言及している指示修飾で, これらの old, new は後に 3.3 節でみる determining adjectives と似た役割をもっている。一方, (14 c) の young は owner の年齢について言及しており, よってこれは指示物修飾である。

(12 f) のうち, big, enormous, small に関しては以下のような指示修飾の例が多い。

2) モノの状態とヒトの状態の両方を表す形容詞が中には存在するが, ここには主にモノに言及することが多いものを挙げる。同様に, 次の (12 h), (12 i) は主にヒトの特徴を表すものであり, モノを修飾する場合もあるものが多い。

- (15) a. All my children are big eaters. (*Oxford Collocations Dictionary for Students of English*)  
 b. Nishikori, who stands just under 5 ft 10 in and weighs less than 11 st, is only No 11 in the world ranking but already is one of the sport's biggest earners because of the vibrant Japanese endorsement market. (*The Sunday Times*, Sep.7, 2014; 下線は筆者)  
 c. a new plan to help the small farmer (*Oxford Collocations Dictionary for Students of English*)

指示修飾とは先に述べたように動作主名詞の基盤となっている事象や行為を修飾することであり、したがって、動作主名詞により活性化されるドメインの中に、形容詞の意味と整合する要素が存在している場合にこれが可能になる。(15 a) の *eater* が理解される際に活性化されるドメインには、何を、いつ、どのような方法や様態で、どれくらいの量食べる人かといった要素が含まれており、量のスケールに *big* という形容詞が対応して結合が生じている。*eater* に関しては、例えば *messy eater* という例はそのドメイン内の方法や様態に、また *healthy eater*, *fussy eater*, *picky eater* ではどんなものをどう選んで食べているかという部分に形容詞が対応して表現が成立している。(15 b) はプロテニスプレーヤーの錦織圭選手についての新聞記事の一文で、*earner* のドメイン内に含まれる金額のスケールに対して *big* という属性が付与されている。

一方、(15 c) はその人を *farmer* たらしめる所有物、つまり *farm* の規模を、形容詞が表している例である。この場合も、*farmer* のドメインに所有物が不可欠な要素として含まれていることで、その大きさを表す形容詞による修飾が可能になっている。一方、*small* とほとんど同義の *tiny* の以下の例は *language-users* で指示される子どもが小さいことを表し、指示物修飾である。つまり、*language-users* のドメイン内で *small* と整合するのは、ヒトとしての大きさに関わる部分だということになる。

- (16) By 18 months, most have learned to say about 50 words. What are they talking about, these tiny language-users? (*A Little Book of Language*, p.34; 下線は筆者)

(12 f) で挙げている *light*, *heavy* については、頻出する *light sleeper*, *heavy smoker* などの例があるが、これらはその人の体重について言及しているわけではなく、指示修飾である。これらの形容詞に関しては普通名詞を修飾する場合もその「程度」を表すことがよくみられ (e.g. *light make-up*, *heavy drinking*, etc. (LDOCE)), 重量に関する意味からほかの意味への拡張が進んだ形容詞であるといえる。

- (12 g) で挙げた形容詞が指示修飾で解釈される例は、上で挙げた *messy eater* のほかに以下のものがある。

- (17) a. I'm a firm believer in old-fashioned good manners! (*Tales of a Fourth Grade Nothing*, p.18)  
 b. He is known as a very tough negotiator who always makes one last grab for something on the table. (COCA)  
 c. a natural musician (LDOCE)

*firm* は物質が硬いという基本的な意味から、信念や地位などがなかなか揺るがないという意味への拡張がみられ (e.g. *firm belief/decision*, etc. (LDOCE)), *believer* にも整合したものといえる。(17 b) の *tough* も同様にモノもヒトも修飾することが可能で、頑固で厳しく、相手にとって難しい交渉相手だということを表す。(17 c) は *musician* としての才能について、それを生まれつきのものとして言及したものである。(12 i) に分類しているが、動作主名詞としての資質が生来のもので、その人の中かなりの程度まで内在化していることを表すのに *native* という形容詞も使われ、(17 c) の *natural* に類似した意味が観察される。身近な例として *native speaker of English* があるが、次のような例もある。

- (18) As a native pubgoer, I had always performed the pantomime ritual automatically, like everyone else, without ever questioning or even noticing its strange and complex rules. (*Watching the English*, p.93; 下線は筆者)

pubgoer であることが生来のものとまではいかないが、かなり長い間自然なものとして定着しており、それに伴うルールなども意識することもないレベルまで内在化していることを表している。

(12 h) の外面的特徴を表す形容詞に関しては、例えば handsome writer/actor/tourist/visitor などは典型的な指示物修飾である。ヒトの容姿や外見を表す形容詞は、動作主名詞のヒトとしてのドメインと結び付くのが自然だからだと考えられる。beautiful/elegant dancer のように、指示物修飾と指示修飾両方の解釈が可能な例があるが、興味深い現象として、次のように性別や年齢を表す形容詞が dancer との間に入ると、指示物修飾のみの解釈になる。

(19) beautiful male/young dancer

継続的・安定的な属性である male, young による修飾で dancer のドメイン内のヒトとしての側面に焦点が当たり、前景化されると考えられる。

(12 i) の内面的特徴を表す形容詞が動作主名詞と結合する例をみてみよう。

- (20) a. Yet nobody predicted that this small, shy player would one day become the first Asian male competitor to contest a Grand Slam final. (The Sunday Times, Sep.7, 2014; 下線は筆者)
- b. Dr. Ruth Wright Hayre is a smart investor, so you should listen to her advice.
- c. Hey, watch out! Here comes another crazy driver! (COCA; 下線は筆者)

内面的特徴の中でも、shy, kind, mean といったある程度持続的な性格などを表すものは (20 a) のように指示物修飾の解釈が優勢である。(20 b-c) においては、investor, driver のドメイン内にその行為を行う能力や技術に関わる部分があり、そこにそれぞれの形容詞が対応している。これらの動作主名詞は、その人の職業としてではなく、習慣的な行動または能力として言及されたものである。職業名として言及された動作主名詞と同じ形容詞が結合した場合、例えば smart writer/artist のような場合は、指示物修飾になる。つまり、この場合は writer のドメイン内の「書く」という行為、さらにその様態には焦点が当たらず、その「作家」の人物としての側面のほうが前景化しているといえる。

最後に挙げた (12 j) の評価や質を表す形容詞は、動作主名詞と最も頻繁に共起し、指示修飾になるグループである。動作主名詞の基盤となる行為に、良いか悪いか、上手か下手か、といった評価を下すことは日常的に行うことであり、語の結合もかなりの頻度で行われる。successful の例をみてみよう。

- (21) a. After all, Mr. Wormwood was a successful motor-car dealer so she presumed that he was a fairly intelligent man himself. (Matilda, p.85; 下線は筆者)
- b. Successful applicants will be contacted for an interview.

同じ形容詞であるが、(21 a) は状態的である程度長期にわたる属性を示すのに対し、(21 b) は求人広告にみられる文例で、「書類選考を通過した」というような、極めて短い属性を表しており動態性が高い。この違いは (21 a) の motor-car dealer が個体解釈名詞、(21 b) の applicant が事態解釈名詞であることと関係している。つまり、motor-car dealer という仕事で成功していることはある程度の期間、また人としても成功しているとみなされることに近い。対して applicant はその場限りその人に与えられた役割であり、それに影響を受ける形で、successful に含まれる「成功」も一時的なもの、つまり次の選考段階に進めるというような、特定化・限定化された事象を示している。

### 3.2 動態的な形容詞と動作主名詞の結合

本節では動態的な形容詞を意味的に分類し、動作主名詞と結合する場合にどのような関係を持つか考える。つまり stage-level の形容詞と動作主名詞との結合である。どの程度の間持続すれば「静的・安定的」または「一時

的」といえるのか判断し難く、状態的または動態的なものとして分類するのは困難な形容詞も存在するが、主に「動態的」と捉えられるものを以下に挙げる。

(22) 動態的な形容詞 (dynamic adjectives)

- a. 速度: fast, quick, prompt, slow, speedy, rapid
- b. 時期: early, late
- c. 様態: hard, persuasive, competitive, eloquent, fluent, formal, casual, sloppy
- d. 頻度: frequent, occasional, rare, regular, habitual, chronic
- e. ヒトの内面的な状態: hungry, sleepy, drowsy, careful, attentive, careless, diligent, helpful, thoughtful
- f. 感情, 心情: angry, sore, anxious, nervous, sad, lonely, happy, emotional, lucky, curious, enthusiastic, ambitious, suspicious, patient, proud, hopeless, jealous, desperate

指示物修飾では動作主名詞により活性化される人としてのドメインの属性を形容詞が表すことになるので、人であるという属性が静的・継続的である以上、これらの動態的な形容詞と整合することは難しく、よって指示修飾のほうがはるかに多くみられる。特に様態や頻度を表す形容詞と動作主名詞の結合は、以下のようにかなり定着化の進んだものが多い。

(23) a. fast typist/learner/runner

- b. I'm an early riser.
- c. He is a hard worker.
- d. He is a fluent speaker of French.
- e. The museum is of great interest, both to experts and to casual visitors. (LDOCE; 下線は筆者)
- f. It is worth noting in this context that some regular pubgoers have a 'pub-nickname' which is not used by their friends and family outside the pub, . . . (Watching the English, p.99; 下線は筆者)

さらに、職業はその人のある程度継続的な属性であることから、動作主名詞が職業を指す場合は動態的な形容詞と結合しにくいことも予想される。(23)の例で職業名は *typist* のみであり、感情・心情を表す形容詞の以下の例でも、動作主名詞が職業を表しているものはみられない。ただし、個体解釈名詞であることに変わりはなく、職業ではないが習慣的な行動を表しており、*stage-level* の形容詞 + *individual-level* の名詞の結合である。

- (24) a. She was the first to speak. "Are you a nervous flier?" she said. (Cheeseburgers, p.97; 下線は筆者)
- b. He is an emotional eater. (= (3 c))

それぞれの動作主名詞により活性化される感情ドメインがあり、その感情が形容詞により表されている。(24 a) はいつも飛行機に乗ると緊張する人、(24 b) はある種の感情になったときに食べるという行動をする人ということで、どちらも感情と結びついた習慣的な行動を表している。

次の(25)は *stage-level* の形容詞 + *stage-level* の名詞の結合である。(25 a) は *loser* になったことで怒って負け惜しみを言う人のことであり、(25 b), (25 c) も *voter*, *standby passengers* としてそれぞれの感情を保有したり表明したりしていることを示す。ただしこれらの場合、感情を持つのは動作主名詞によって指示される人であり、その人にそれぞれ *voter* や *passenger* といった、その場での役割が与えられているに過ぎない。よって、基盤事象や動詞の概念を修飾するというよりは、指示物修飾に近いといえる。(25 d) の *lucky* は *winners* を紹介する際の枕詞のような役割を担っている。

- (25) a. I was proud of Dad for admitting that he'd acted like a sore loser. (Fudge-a-mania, p.120; 下線は筆者)
- b. . . . there are a lot of angry voters out there . . . (COCA; 下線は筆者)

- c. A final head count was taken and anxious standby passengers were allowed to board.

(*Mirror Image*, p.1 ; 下線は筆者)

- d. Five lucky winners will each receive a signed copy of the album.

(LDOCE)

- e. the proud owner of a new camera

(*Oxford Collocations Dictionary for Students of English*)

また、この場合の *lucky* という心情は *winners* で指示される人たちが自身について持っているだろうと思われるが、それとは関わりなく、話し手がその人たちに対して付与して結合させ言語化している。形容詞の意味を考えると、ある対象の属性や性質というものは知覚者と知覚対象の相互作用から生まれる「相互作用性的性質」と考えるべきだという主張がある(篠原 2002, 2008)。例えば *a difficult book* という場合、*book* という知覚対象に *difficult* だと知覚者に感じさせる要因は存在しても、*difficult* という属性自体が内在しているわけではなく、その知覚者が対象と関わり認識して初めて成り立つ属性だという考え方である。篠原(2008)は状態的(静的)な形容詞、例えば「赤い」も同様の「相互作用性的性質」とあり、「赤い」という性質が対象に内在する静的で安定した性質であるかのように捉えられるのは「知覚者と対象との関係」が静的で安定しているためだとする。その点からいえば、ここで挙げている感情・心情というものは知覚者が主観的に認めた場合が相対的に多く、知覚対象が示す要素と、知覚者が認定した属性との関係は安定性が低いといえる。特に(25 d)においては、*lucky* という属性の認定において知覚者(話し手)の果たしている役割のほうが、対象(*winners*)が示す要素よりも大きな部分を占めているように思われる。(25 e)においても、*owner* で指示される人が *proud* にみえる要因を持っており、それを知覚者が *proud* だと認定しているわけだが、同様の主観性と不安定性がみられる。

### 3.3 位置付けの働きをする形容詞との結合

ここでは動作主名詞のステイタスに言及するような形容詞を意味的に分類する。ヒトやモノを直接的に特徴づけるのではなく、名詞によって指示されるモノやヒトをカテゴリーや何らかの軸に位置付ける働きをする形容詞である。Quirk et al. (1985) では “noninherent adjectives” (非内在的形容詞)、Radden & Dirven (2007) では “determining adjectives” と呼ばれ、*a wooden actor*, *a true scholar*, *a perfect stranger* などが例として挙げられている。

- (26) a. 真偽, 心的態度, モダリティを表すもの: *true, false, fake, suspicious, alleged, relative, absolute, favorite, same, different*  
 b. そのカテゴリー内の地位を表すもの: *complete, total, typical, perfect, ideal, normal, genuine, real*  
 c. 時間軸に対象を位置付けるもの: *previous, former, prior, first, future, current, present, past, potential, prospective, eventual*

いくつか例をみてみよう。

- (27) a. He is my favorite singer.

- b. ... as somehow implying that you are immune to the stresses and upsets afflicting all normal house-buyers.

(*Watching the English*, p.119 ; 下線は筆者)

- c. The latest crime figures are likely to put off prospective visitors to the city.

(*Oxford Collocations Dictionary for Students of English* ; 下線は筆者)

(27) の *singer*, *house-buyers*, *visitors* はすべて動詞的概念を基盤として持っているが、共起する形容詞と動詞的概念の間に依存関係はなく、その行為を特徴づけているわけではない。結合している形容詞が表すのは、(27 a) では話し手の心的態度、(27 b) では話し手が判断する “*house-buyers*” というカテゴリー内のステイタス、(27 c) では時間軸上の位置と、すべて動作主名詞の基盤事象や行為に関する属性ではない。これらの形容詞と結合が可能であるためには、動作主名詞がその人の役割を示すものとして確立しておく必要があるため、職業名と特に(26 a, b) の形容詞の結合はかなり容易に発生する。また、その事象や行為が完結し、その結果がその人の役割と

して定着している場合に結合が可能になるので、以下のような容認度の違いがみられる。

- (28) a. \*eventual/\*potential eater  
b. eventual winner, potential employer/employee

つまり、基盤となる動詞が完結点を含まない activity を表し、何らかの結果が生じておらずその人の役割として確立していない場合は、これらの形容詞との結合は困難になるといえる。

#### 4. 結 語

形容詞を分類し、動作主名詞と結合したときにその基盤である行為・事象の特性に言及しているのか、つまり指示修飾か、あるいは人としての特性への言及か、つまり指示物修飾かという点を中心に考察を行った。形容詞が人としての継続的・潜在的な属性、例えば性別や国籍などを表す場合は、動作主名詞と結合しても普通名詞 (e.g. man, husband, etc.) と結合した場合とほぼ変わらず、人としてのドメインが活性化され、指示物修飾になるケースが多い。人の外面的・内面的特徴を示す形容詞においては、各語において揺れがみられ、動作主名詞のドメイン内にその形容詞と意味的に整合する部分があれば、その部分が活性化され、動作主名詞の基盤事象・行為を修飾することになる。例えば handsome は行為や動作に関わる側面と結び付きにくい形容詞だが、smart, polite はその行為をどのように行うかという様態に関わる側面と整合し、その属性に言及することが可能である場合が多い。同じ状態的な形容詞の中でも、例えば skillful という能力または評価を表す形容詞については、人として上手であるというのは意味を成さず、何においてそうかという要素が必要であり、それを動作主名詞が示している。よって人としての側面ではなく、基盤事象の属性を示す指示修飾のほうが多くみられることになる。また、サイズを表す big, small に関しては、基盤事象や所有物の規模に関わるドメインが活性化され、それについて言及している例が多く存在している。(21) でみた successful については、動作主名詞が个体解釈か事態解釈かということが形容詞が示す属性の持続期間に影響を与え、異なる意味を発生させるという興味深い現象がみられる。

動態的な形容詞と動作主名詞の結合に関しても、形容詞が動作主名詞のドメインのどの部分と整合するかによって、指示修飾あるいは指示物修飾の違いが生じることになる。速度や様態、頻度を示す形容詞においては定着化の進んだ結合が多くみられ、動作主名詞の基盤事象に関するドメインが活性化された指示修飾が多い。一方、ヒトの内面的な状態や感情、心情を表す形容詞については、基盤事象のドメインが活性化される場合もあるが、身体的状態や感情は人に内在し人が感じるものであることから、人としてのドメインが活性化される場合も多くみられる。

#### 参 考 文 献

- Athanasiadou, Angeliki. (2006) "Adjectives and subjectivity," *Subjectification: Various Paths to Subjectivity*, ed. by Athanasiadou, Angeliki et al., 209-239, Mouton de Gruyter.
- Bolinger, Dwight. (1967) "Adjectives in English: Attribution and Predication," *Lingua* 18, 1-34.
- Busa, Federica (1996) *Compositionality and the Semantics of Nominals*. A Dissertation Presented to the Faculty of the Graduate School of Arts and Sciences, Brandeis University.
- Carlson, Gregory N. and Francis Jeffry Pelletier. (ed.) (1995) *The Generic Book*, The University of Chicago Press.
- Givón, Talmy. (1979) *On Understanding Grammar*, Academic Press.
- 池上嘉彦・米山三明・西村義樹・松本曜・友澤宏隆 (訳) (1995) 『現代英語文法 大学編 新版』紀伊國屋書店.
- Jackendoff, Ray. (2010) *Meaning and the Lexicon: The Parallel Architecture 1975-2020*, Oxford University Press.
- 影山太郎. (2002) 「動作主名詞における語彙と統語の境界」『国語学』第53巻1号, 44-55.
- 岸本秀樹・菊池朗. (2008) 『叙述と修飾』研究社.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford University Press.
- 李在鎬・村尾治彦・浅尾仁彦・奥垣内健. (2013) 『認知音韻・形態論』くろしお出版.
- 宮島達夫. (1997) 「ヒト名詞の意味とアスペクト・テンス」川端善明・仁田義雄 (編) 『日本語文法: 体系と方法』157-171. ひつじ書房.
- Pustejovsky, James. (1995) *The Generative Lexicon*, The MIT Press.

- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and J. Svartvik. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman.
- Radden, Günter and René Dirven. (2007) *Cognitive English Grammar*, John Benjamins Publishing Company.
- 篠原俊吾. (2002) 『『悲しさ』『さびしさ』はどこにあるのか：形容詞文の事態把握とその中核をめぐって』西村義樹（編）『認知言語学Ⅰ：事象構造』東京大学出版会, 261-284
- . (2008) 「相互作用と形容詞」森雄一・西村義樹・山田進・米山三明（編）『ことばのダイナミズム』くろしお出版, 89-104.
- Taylor, John R. (1992) “Old problems : Adjectives in Cognitive Grammar,” *Cognitive Linguistics* 3-1, 1-35.
- . (2003) *Linguistic Categorization*, 3rd edition, Oxford University Press.
- Vendler, Zeno. (1968) *Adjectives and Nominalizations*, Mouton.
- 安井稔・秋山怜・中村捷. (1976) 『形容詞（現代の英文法 第7巻）』研究社.

## 例文出典

- A Little Book of Language*, by David Crystal, Yale University Press., 2010
- Boy : Tales of childhood*, by Roald Dahl, Puffin Books., 1986
- Cheeseburgers*, by Bob Greene, 講談社英語文庫., 1989
- Matilda*, by Roald Dahl, Puffin Books., 1988
- Mirror Image*, by Sandra Brown, Grand Central Publishing., 1990
- Tales of a Fourth Grade Nothing*, by Judy Blume, Puffin Books., 1972
- Watching the English : The Hidden Rules of English Behaviour*, by Kate Fox, Hodder & Stoughton., 2004
- COCA (Corpus of Contemporary American English)
- LDOCE : *Longman Dictionary of Contemporary English*, Fifth Edition, 2009
- Oxford Collocations Dictionary for students of English*, Second Edition, 2009